

近世後期江戸語における謙讓語形式の使用

——「お～もうす」、「～もうす」、「～いたす」に着目して——

山 田 里 奈

1. はじめに

本稿は、近世後期江戸語における謙讓語形式（「お（ご）～もうしあげる」「お（ご）～もうす」「お（ご）～いたす」（以下、「お～もうしあげる」「お～もうす」「お～いたす」と記す）、「～もうす」「～いたす」）の使用について考察を行ない、その使用実態について明らかにすることを目的としている。

当期における謙讓語は、坂本恵（1984）等で丁重語として用いられていたことが指摘されている。また、謙讓語形式の変遷については小松寿雄（1967、1968）等で明らかにされている。しかし、階層による違いや用例数の偏りによる各形式間の違いについては、管見の限り、説明されたものはないと思われる。

そこで本稿では当期における謙讓語形式の階層差、用例数の偏り、どのような関係で使用されているのか等を記述し、各謙讓語形式の関係を明らかにする。これにより、当期における丁重語の使用状況や、聞き手に対する丁寧な言葉遣いについての研究の一端を示すことができると考えられる。

2. 謙讓語形式について

謙讓語形式の変遷、各謙讓語形式の特徴についての先行研究を挙げる。

2.1 謙讓語形式の変遷

近世後期江戸語から明治期東京語における謙讓語形式の変遷については、小松（1967）に詳しい。氏によると、近世後期江戸語と明治期東京語を通じて、もっとも一般的に用いられた形式は、「お～もうす」であった。「お～いたす」は、江戸末期に成立し、「お……申す」のあとを埋め（P.98）ることになる。江戸語では、「お……申す」「……申す」というのがこの種表現の大綱」であっ

(2)

たが、「幕末になると、町人ことばから「……申す」が、ほとんど姿を消してしまう (p.98)。「お」を冠するか冠さないかにより、使われる頻度に違いが見られるようになる。そして、待遇的な観点からは、「上位を担う「お……申す」が不変であったのに対し、下位を担う「……申す」がほろび、「お……いたす」「お……する」が次々に成立した (P.99)」と説明している。

2.2 接続する動詞の特徴

伊藤博美 (2013) では、「お～する」と「お～もうす」について、動詞の種類により違いが見られることを述べ、それが聞き手を重視する傾向への変化とともに、「お～する」との交替の要因になったのではないかと説明している。具体的には、「お～申す」は、「働きかけの有無やその内実に関わらずに、補語への敬意を表せる生産的形式であったことが確認できる。そして、その点に着目すると、形式内に入る語の性質や使用原理という点において、中古から近世に至るまでの謙讓語の性質を受け継いでいる可能性がある。(P.67)」とし、「お～する」が「補語への具体的な働きかけに関する直接的な表現で、かつ補語の受容が想定できる行為を表現する動詞のみ」に接続する点が異なるとしている。「お～する」成立前の本稿の対象時期は、生産的形式のみが用いられていたことがわかる。

2.3 各形式の使用

(1) 「お～もうしあげる」、「お～もうす」「～もうす」

以下、関連する箇所を引用する。下線は山田による加筆である。

・湯沢幸吉郎 (1954、1957)

「もうす」の主な用法は、大体二つに分けて見られる。

【一】敬讓の意を含む動詞式活用の連用形・漢語・名詞等に附いて、謙語動詞とする。(動詞には接頭語「お」、漢語には「ご」の附くのが普通である。)【中略】なお次の例のように「もうす」の代りに「もうしあげる」を用いると、謙下の意味が一層強くなるが、江戸物にはこの用例はあまり見えない。

【二】平常語の動詞式活用の連用形に附く。この場合は謙下の意味が薄くなる。(第二十四項 「もうす (申)」、「申上げる」(P.232-233))

・小松寿雄 (1971)

「申す」は古来多用された動詞で、すでに前代からその用法は多岐にわたっていた。江戸時代の意味・用法もこれを受けて、複雑である。後期江戸から明治東京語にかけてはその整理縮小の時期に当たるようで、おそらく江戸時代前

期が最も複雑な時代だったろう。【中略】形から整理すると、本来の動詞としての独立の用法、名詞や動詞連用形につく「……申す」の用法、「お……申す」の用法、「申つくる」などの「申……」の用法などがあつた。意味からいうと、「言ふ」の謙讓語（本動詞）、上の動詞等の動作者と動作の受け手の関係の規定（「お……申す、……申す）」、今日の「ます」に近いようないわゆる丁寧の意味（……申す）などがあつた。（P.359）」と述べている。

(2) 「お～いたす」「～いたす」

以下、関連する箇所を引用する。下線は山田による加筆である。

・湯沢幸吉郎（1954、1957）

「いたす」は「する」の丁寧語であつて、次のごとく用いられる。

【一】主として漢語に附いて、丁寧の動詞をつくる。

(A) は単なる丁寧語をつくるものであるが、(B) は謙語に丁寧の意を添えたもの。(C) も同様であるが、「ご」「お」の接頭語の附いたもの。この場合には「噂」「供」のような国語名詞も用いられる。（第五項 「いたす」(P.188)）

・小松寿雄（1971）

「致す」の場合は武士やそれに準ずる身分の人が主として用いたが、町人も「致します」の形で、あるいは「致す」単独で重々しい表現に使用した。「お……致す」は、その動作の及ぶものを尊敬する謙讓動詞として用いられた。【中略】「致す」や「……致す」は、右のようにその動作の及ぶ対象を尊敬するという働きが少なく、その点「お……致す」とは相違する。（P.357）」と説明している。

湯沢氏と小松氏に共通するのは、「お」を冠する場合、謙讓語的であり、「お」を冠さない場合、丁寧語または丁寧語であるという捉え方である。他に、辻村敏樹（1968）が、『浮世風呂』と『浮世床』における「いたす」「もうす」の説明で、「今日と同様、或いは独立で、或いは、「（御）……いたす」「（御）……申す」の形式で、謙讓語に用いられるが、やはりすでに丁寧語になっているものもある。（P.244）」と述べるように、「お」の有無に関わらず、丁寧語・丁寧語として使用されたという見方もある。

2.4 問題の所在と本稿の目的

以上、先行研究について見てきた。「お」の有無による使用の違いという点は現代語と共通するが、現代語と全く同じであったかどうかについては、考察の余地があるのではないと思われる。

(4)

そこで本稿では、以下の二点について述べる。

- (1) 各表現形式の関係
- (2) 歴史的変遷における位置づけ

以下、3節では、考察方法や調査対象資料について説明し、4節で近世後期江戸語における謙讓語形式の考察を行ない、5節でまとめる。

3. 考察方法・調査対象資料

3.1 考察方法

考察は、行為の主體の人称（敬語的人称¹）と話し手や聞き手と補語との上下関係の二つの観点から行なった。謙讓語の行為の主體はふつう、Ⅰ人称（話し手側の領域の人物）であるが（謙讓語は、話し手が自分の領域の人物を低く位置付けることにより聞き手に対して敬意を示す）、後述するがⅡ人称と考える例も見られ、Ⅲ人称（話し手側の領域と聞き手側の領域のどちらか一方とはいえない人物）のこともある。

二つめの話し手や聞き手と補語との上下関係に注目するのは、謙讓語が補語を高める性質を持っているためである。補語が〈対等〉の関係以上であるとき、話し手が敬意を表そうとしていると考える。そして、補語に敬意を表そうとしている場合、謙讓語の使用に近く、そうではない場合、丁寧語の使用に近いと考える。

階層は、町人を中流以上と下層に分け、芸者や花魁、新造などは「芸妓」として扱った。階層の違いや店主と客、芸妓と客、主従関係が認められる場合に、〈下→上〉の関係、〈上→下〉の関係とした。互いに似た言葉遣いをする場合や同じ階層の場合を〈対等〉の関係とした。

3.2 調査対象資料

調査対象資料は、洒落本、滑稽本、人情本である。地の文、武士やそれに準

¹ 菊地康人(1994・1997)による分類方法である。Ⅰ人称は「話し手側の領域の人物」、Ⅱ人称は「相手側の領域の人物」、Ⅲ人称はⅠ人称やⅡ人称以外の純粋なⅢ人称となる(P.119)。菊地(1994・1997)は、行為の主體により、Ⅰ人称者が謙讓語A、Ⅲ人称者が謙讓語Bという判断基準を示しているため、本稿でも重視することにした。

坂本(1984)に、「絶対謙讓語の場合、敬意の対象、配慮を払う相手は明確ではない。謙讓語と言った場合、その動作主體(ふつうははなして、はなして側のもの)を低く位置づける、という性質を考えるが、この場合も、何に対して低いかは明らかではない。(P.11)」とある。本稿では、坂本(1984)を踏まえつつ、補語と話し手、聞き手との関係を考慮しながら考察を進める。

ずる人物の発話は除外し、会話部分を対象とした。詳細は最終ページにまとめた通りである。

4. 近世後期江戸語における謙譲語形式の使用概観

4.1 概観

近世後期江戸語における謙譲語形式のパリエーションを見るために、形式と用例数、全体に占める割合を示した表が、次の【表1】である。以下、「お～もうしあげます」と「お～もうしあげる」をまとめて指す場合、「お～もうしあげる」系と呼ぶ。他の表現形式も同様である。

【表1】近世後期江戸語における謙譲語形式

謙譲語形式	用例数	割合 (%)
「お～もうしあげる」系	5	1.1%
「お～いたす」系	7	1.5%
「お～もうす」系	304	64.7%
「～いたす」系	80	17.0%
「～もうす」系	74	15.7%
合計	470	100.0%

用例数の分布のうち、「お」を冠する形式の中では、「お～もうす」がもっとも多く(64.7%)、「お」を冠さない形式の中では、「～いたす」

(17.0%) がもっとも多く用いられていることがわかる。そして、「～もうす」(15.7%)と続いている。このような用例の分布が見られるのは、小松(1967)が、「お……申す」「……申す」というのが、この種表現の大綱であった。しかし、幕末になると、町人ことばから「……申す」が、ほとんど姿を消してしまう。(P.98)」と指摘している傾向へと向かおうとしている時期のためと考えられる。なお、資料ジャンルの特徴として、洒落本では「お～もうす」系と「～もうす」系が大半を占めており、小松(1967)の状況を確認できる。

ただし、次の【表2】からわかるように、接続する動詞を自動詞か他動詞かで見ると、「～いたす」のみ、自動詞での使用に偏りが見られ、他の形式と相補関係にあると考えられる。

そもそも、自動詞は「日本語の動詞で、「を」格の目的語をとらず、作用が主語自体に止まるものとして述べられる動詞。(『日本国語大辞典(第二版)』)である。「日本語の動詞で、その作用が及ぶ対象の事柄を、「を」格の目的語としてとるもの。(『日本国語大辞典(第二版)』)」である他動詞に比べ、聞き手との関係に配慮して使用することが少ないため、全体の用例数も少ない。その中で「お～もうす」と「～いたす」に偏って使用が見られたということは、小松(1967)が指摘する大きな流れ(「お～もうす」「～もうす」から、「お～も

(6)

【表 2】自動詞と他動詞の分布

自動詞・他動詞の分布	自動詞		他動詞		計
「お～もうしあげる」系			5	100.0%	5
「お～いたす」系	2	28.6%	5	71.4%	7
「お～もうす」系	31	10.2%	273	89.8%	304
「～いたす」系	48	60.0%	32	40.0%	80
「～もうす」系	7	9.5%	67	90.5%	74
計	88	18.7%	382	81.3%	470

うす」「お～いたす」「お～する」へ) を動詞の種類からも確認することができたといえる。

4.2 行為の主体からの考察

次に、行為の主体について見ていく。まとめると、次の【表 3】のようになる。

【表 3】行為の主体は誰か

	敬語的人称	I 人称	II 人称	III 人称		計
		—	—	Ⅲ - ① 人物	Ⅲ - ② 事物	
「お」 あり	「お～もうしあげる」系	5				5
	「お～いたす」系	7				7
	「お～もうす」系	272	24	8		304
「お」 なし	「～いたす」系	63		11	6	80
	「～もうす」系	62	12			74
	計	409	36	19	6	470

【表 3】から、「お～もうしあげる」系と「お～いたす」系は、I 人称でのみ使用されていることがわかる。「お～もうす」系は、I 人称、II 人称、III 人称で使用が見られ、使用範囲が広いことがわかる。また、「～いたす」系は I 人称と III 人称で、「～もうす」系は、I 人称と II 人称で使用されたことがわかる。I 人称での使用に偏る方が、謙讓語の使用と考えられる。「お」を冠さない「～いたす」系や「～もうす」系の使用範囲の広さは先行研究に一致するが (2.3)、「お」を冠する「お～もうす」系の使用範囲の広さは考察の余地があるといえ

るだろう。これらの分布の違いを意識しながら、各表現形式について見ていくこととする。

4.3 話し手と聞き手、補語との関係からの考察

4.2を踏まえ、話し手と聞き手の上下関係を階層ごとに示すと、次の【表4】のようになる。町人（中流以上・下層）と芸妓では用いる表現の種類が異なり、町人の間では、中流以上の人々が〈対等〉の関係で多用するという階層差が見られる。以下、特に特徴的な場合は指摘するが、まとめて形式ごとに述べていく。

【表4】話し手の階層と話し手と聞き手の上下関係

階層	中流以上の人々の使用			下層の人々の使用			芸妓の使用			合計	備考	系ごとの用例数
	〈下→上〉	〈対等〉	〈上→下〉	〈下→上〉	〈対等〉	〈上→下〉	〈下→上〉	〈対等〉	〈上→下〉			
形式/話し手と聞き手の上下関係	〈下→上〉	〈対等〉	〈上→下〉	〈下→上〉	〈対等〉	〈上→下〉	〈下→上〉	〈対等〉	〈上→下〉			
お~もうしあげます	4 (2)									4 (2)		5 (2)
お~もうしあげる	1 (0)									1 (0)		
お~いたします		4 (3)		2 (2)						6 (5)		7 (5)
お~いたす		1 (0)								1 (0)		
お~もうします	18 (15)	33 (28)	2 (2)	16 (16)	6 (6)		7 (5)	5 (3)		87 (75)	不明1	304 (100)
お~もうす	34 (1)	118 (17)	17 (5)	15 (0)	9 (2)	1 (0)	13 (0)	5 (0)		212 (25)	独り言1 不明3	
~いたします	4 (4)	30 (22)		2 (2)						36 (28)	不明1	80 (28)
~いたす	12 (0)	25 (0)		2 (0)				1 (0)		40 (0)	不明3	
~もうします	5 (5)	1 (1)		1 (1)			10 (7)	2 (2)		19 (16)		74 (29)
~もうす	3 (1)	15 (4)	1 (0)	3 (0)	6 (2)		19 (3)	3 (0)	4 (3)	55 (13)	不明1	
計	81 (28)	227 (75)	20 (7)	41 (21)	21 (10)	1 (0)	49 (15)	16 (5)	4 (3)	460 (164)	10	470 (164)

※ () は文末で使用された用例数の内訳を示している。

(1) 「お~もうしあげる」系

「お~もうしあげる」系で見られたI人称での5例は、以下のような例である。「ます」を伴う「お~もうしあげます」でのみ文末での使用が見られた。文中、文末にかかわらず、話し手と聞き手の上下関係は、〈下→上〉の関係で使用されている。以下の例1は文中での「お~もうしあげる」の例、例2は文末での「お~もうしあげます」の例である。

(8)

- (例1) 吾儕は旦那様に是非今日お目にかゝつてお咄し申上たいことがございまして。(中流女性お絹→中流男性要)【〈下→上〉】(お絹⇒要)【〈下→上〉】
[[『毬(四編～五編)』96] *
(例2) お金さま、ようこそ私方へ入らつしやいました。何とぞお見すてなくおねがひ申上げます。(金を溜める人→金)【〈下→上〉】(金を溜める人⇒金)【〈下→上〉】[[『癖』二編 255]

例1は中流女性から中流男性に対して用いられた例である。「旦那様」と呼ぶ聞き手に対して使用していることから〈下→上〉の関係とした。補語と聞き手は一致している。例2は金を溜める人が金に対して用いた例である。補語は金(ただし、「お金さま」と擬人化している)であり、聞き手と一致している。

したがって、「お～もうしあげる」系は、話し手と聞き手が〈下→上〉の関係で、行為の主体がI人称である場合に使用される。補語は、いずれも聞き手と一致する例であったが、話し手にとって敬意を表わすべき対象であると考えられる。

(2) 「お～いたす」系

「お～もうしあげる」系同様、I人称でのみ使用が見られた「お～いたす」系について見ていく。【表4】からわかるように、話し手と聞き手の関係は、〈対等〉の関係以上で使用され、文末では「ます」下接の「お～いたします」しか使用されない。中流以上の人々の使用は、身分関係では〈対等〉の関係であるが、互いに丁寧な言葉遣いをする間柄でのみ使用されていた。

以下の例3は文末での「お～いたします」、例4は文中での「お～いたす」の例である。

- (例3) ホンニ怜野集をお返し申すであった。永 / \ 御恩借いたしました。有がたうござります。(中流女性・女学者けり子→中流女性・女学者かも子)【〈対等〉】(けり子⇒かも子)【〈対等〉】[[『風呂』三編 198]
(例4) さやうならば明日にも久庵さんを御同道いたしていたゞきに參上ませう。(中流女性お民→中流男性要)【〈対等〉】(お民⇒久庵・要)【〈対等〉】[[『毬(四編～五編)』72]

* 用例は次のように記す。(話し手→聞き手)【〈上下関係〉】(話し手⇒補語)【〈補語との上下関係〉】[[『資料名』編・頁]

例3は、〈私があなたから借りた〉、例4は〈私が久庵さんをあなたのところへ同道する〉というところで使用している。例3は補語と聞き手が一致している。例4の補語である「久庵」は、話し手と聞き手にとって知り合いであり、〈対等〉の関係にあたる人物であると考えられる。

したがって、「お～いたす」系は、話し手と聞き手の関係が〈対等〉の関係以上で丁寧な言葉遣いで話す場合に、補語が話し手にとって敬意を表わす場合で使用されている。

(3) 「お～もうす」系（「お～もうしいす」「お～もうしいんす」「お～もうしなんす」「お～もうしやす」「お～もうしんす」含む）

「お～もうす」系の使用は、「お～もうします」だけでなく、「お～もうす」も文末で用いられる点が「お～もうしあげる」系や「お～いたす」系と異なる。

(3-1) 「お～もうします」

「お～もうします」は、I人称でのみ使用され、【表4】において、〈上→下〉の関係で使用が見られるが（例5）、主として〈対等〉の関係以上で使用される。

（例5）お席が亦いつもの申戯ばかり。とても夫婦には及びもないが。せめて壹度お登が有ツたらば夫を見初の見納にあの世でお待申姓。（中流女性・女主人お組→中流女性お席）【〈上→下〉】（お組⇒彦三）【〈対等〉】〔『恋』四編 169〕

例5は、話し手のお組は女主人であり、聞き手のお席は腰元という関係のため、〈上→下〉の関係とした。他の発話内で話し手から聞き手に対して敬意を表わす表現は用いられていない。ただし、ぞんざいな言葉遣いで話しているわけではない。この発話では、〈（私は彦三さんのお登りがあったならば、見納めにあの世で）彦三を待つ〉という意味で使用している。話し手と聞き手にとって、補語にあたる「彦三」は、話し手にとって憧れる存在であるため、敬意を表わす対象と考えられる。したがって、例5は謙讓語の使用と考えられる。

次の例6は、中流女性同士の会話である。

（例6）熊の腹帯だの、子安のお守だの、お雛形だのと、それは / \ 有がたい品を方 / \ さまからお借申ました。（中流女性辰→中流女性巳）【〈対等〉】（辰⇒方々さま）【〈下→上〉】〔『風呂』三編 91〕

例6の話し手と聞き手の関係は〈対等〉の関係で、かつ互いに丁寧な言葉遣いをする関係である。補語は「方々さま」で、「様」をつけていることから、〈下→上〉の関係と考えることができる。

したがって、「お～もうします」は、行為の主体はI人称で使用され、補語との関係は〈対等〉の関係以上で使用される。話し手と聞き手の関係に関係なく、補語に敬意を表す例(例5、例6)が見られること、補語が〈対等〉の関係以上であることから、謙讓語的使用がされていたことがわかる。

(3-2) 「お～もうす」

「ます」を下接しない「お～もうす」はI人称、II人称、III人称で使用され、文末で〈下→上〉の関係から〈上→下〉の関係まで広く使用されている(【表4】)。「ます」を下接しない「お～もうす」の場合、他の形式とは異なる特徴が見られる。以下、敬語的人称にわけて用例を示す。

① I人称での使用

I人称での使用は、話し手と聞き手の上下関係は〈下→上〉の関係から〈上→下〉の関係までの広い範囲で使用されている。補語との関係は、いずれも〈対等〉の関係以上で使用されている(1例、〈上→下〉の関係の例が見られたが、武士的な言葉遣いの中であつた)。そのため、話し手は補語に対して敬意を表そうとしていることがわかる。

(例7) ぜひ近日に金調ひ請戻す迄此品をあづかつてくれと事をわけて被仰ゆへよぎなく御預り申たところ俄の御入用とて金を揃ひ請戻しにおいでゆゑ〈下略〉。(中流男性与四郎→中流男性彦三)【〈対等〉】(与四郎→千葉様)【〈下→上〉】[『恋』三編113]

(例8) そうだけれど。けふこなたへ来ることを。旦那におはなし申さなんだから。泊ってはどふも濟ないよ。(中流女性小三→乳母)【〈上→下〉】(小三→金五郎)【〈対等〉】[『仮名(第三編)』124]

例7は中流男性同士の〈対等〉の関係での会話である。補語は「千葉様」であり、話し手にとって〈下→上〉の関係にあたる。例8は中流女性から乳母に対して用いられた〈上→下〉の関係での使用例であるが、ぞんざいな言葉遣いではない。補語は話し手の夫であるため、〈対等〉の関係である。例7、例8は、どちらも補語が〈対等〉の関係以上であることから謙讓語的な使用といえるだ

ろう。

ただし、「お～もうす」の場合、次の例9のように、乳母と子守のぞんざいな言葉遣いの会話での使用も見られる。

(例9) おれがお育申たからはおれが子も同然だ。(乳母→子守)【〈対等〉】(乳母⇒お嬢さん)【〈下→上〉】[『風呂』二編 138]

例9は乳母と子守のぞんざいな言葉遣いでの使用であるが、二人にとっての主人の娘(「お嬢さん」)が傍にいる。補語は傍にいる「お嬢さん」であることから、話し手は補語に敬意を表わすために「お～もうす」を用いていると考えられ、例9も謙讓語的な使用といえる。

② II 人称での使用

II 人称での使用は、文中、文末どちらの使用も見られたが、文末での使用はすべて、以下の例のように命令形での使用であり、話し手と聞き手の関係は、〈対等〉の関係以下で用いられていた。以下の例10、例11は、II 人称で文末で使用された例である。

(例10) いらツしゃいまし。お二階へいらツしゃいまし。お多葉粉盆をおあげ申(し)なヨ。(うなぎやの店員→うなぎやの店員)【〈対等〉】(うなぎやの店員⇒客)【〈下→上〉】[『梅』初編 83]

(例11) 市妙和尚なら先日も御目にかゝつたから爰へお通し申ねへナ。(中流男性伴六→中流女性お民)【〈対等〉】(伴六⇒和尚)【〈対等〉】[『毬(四編～五編)』54]

例10はうなぎやの店員が同じくうなぎやの店員との会話で使用している。補語は客であるため、〈下→上〉の関係である。例11は中流男性から中流女性に対して用いられた例である。補語は「和尚」であり、〈対等〉の関係あるいは、〈対等〉の関係以上と考えられる。このような例は、話し手が聞き手を自分と同じ立場にとらえ、補語を高く待遇していると考えられる。そのため、I 人称に近い例といえる。しかし、命令形で使用されるのは当期の特徴といえるだろう。

また、文中での使用には、以下の例12、例13のように、尊敬語・尊敬の表現形式の命令形に上接して使用される例が、中流以上の女性の〈対等〉の関係

での使用に偏って見られるという特徴が見られた（7例中4例）。

(例12) お知らせ申て下はいました。(中流女性お重→中流男性与四郎)【〈対等〉】
(お重⇒小万)【〈対等〉】『恋』五編225]

(例13) ナゼエ、追願ひをなすつて、最二三日お泊なさいましなネエ、お鍋さん。
ヲホ、、、。ホンニ私どもへも些とおよこし申なさいまし。お釜と丁
度能お友達だ。(中流女性いぬ→中流女性きち)【〈対等〉】(いぬ⇒きち)【〈対
等〉】『風呂』二編100]

例12は、話し手のお重が聞き手の与四郎に対して、〈あなたが、芸妓（与四郎の情人）の小万に知らせてください〉という場合で使用している。〈対等〉の関係以上にあたる聞き手を行為の主体にした例であるが、補語は芸妓であるため、「お知らせ申す」は聞き手に対して丁寧な言うために使用したと考えられる。例13は、聞き手に対して、〈あなたがあなたの娘を私の家によこしなさい〉という場合に使用している。一見、自敬表現にも見えるが、「およこし申す」に尊敬表現形式「なさいまし」（または、「よこし申す」に「お～なさいまし」）が下接しており、丁寧な言い過ぎたために生じたものと考えられる。

③Ⅲ人称での使用

Ⅲ人称での使用についてである。Ⅲ人称での使用は、以下の例14、例15のように、文中で用いられていた。

(例14) お部屋様とは御世継をお持まふした妾のことヨ。(中流男性惣次郎→金太)【〈上→下〉】(惣次郎⇒妾)【〈下→上〉】『紫』74]

(例15) 随分御得心遊すやうに御進め申てござりませう。(中流女性お政→中流女性・女主人お組)【〈下→上〉】(お政⇒久七)【〈対等〉】『恋』四編171]

例14は、話し手と聞き手の関係は〈上→下〉の関係である。ここでは、お屋敷の話をしており、〈お部屋様とは世継ぎを持った妾のことだ〉と説明している。聞き手に対しては「ことよ」と丁寧な言い方はしていないため、お部屋様に対して「お持ちもうし」を使用したと考えられる。例15は、中流女性から主人である聞き手に対して用いた例である。〈久七があなたにすすめている〉というところで使用している。お政は久七と同じ立場に位置づけて使用してい

ることから、謙讓語的な使用と考えられる。

(4) 「～いたす」系

「～いたす」系についてである。「～いたす」系は、I 人称とⅢ人称での使用が見られた。話し手と聞き手の上下関係は、〈対等〉の関係以上で使用されていることから、丁寧な言葉遣いの中で使用されることがわかる。「～いたします」は文中と文末で使用が見られ、「～いたす」は文中でのみ使用が見られた。以下、それぞれの用例を挙げる。

(4-1) 「～いたします」(「～いたしやす」含む)

「～いたします」について、敬語的人称ごと見ていく。

① I 人称での使用

「～いたします」の I 人称の使用は以下の例 16、例 17 のように、聞き手に対して丁寧な言い方として使用されている。

(例 16) 小ぎれいな男を亭主に持ましたが、サアおまへさんその人がネ、兎角浮虚が止みませんで大きに苦勞致します。(下層女性弥寿→女房)【〈下→上〉】〔『風呂』二編 124〕

(例 17) 私も先刻からなんでも衰微さんだが、ト存ましたけれど、御存の近眼でごぜへますから、よっぼ思案致しました。(下層男性鼓八→中流男性衰微)【〈下→上〉】〔『風呂』四編 248〕

例 16 は下層女性から中流女性に対して、例 17 は下層男性から中流男性に対して「～いたします」が用いられた例である。例 16 は、〈下→上〉の関係で〈自分の姉が大変苦勞する〉という場合に、例 17 は、〈あなたかどうかを思案した〉という場合に使用している。「苦勞する」も「思案する」も I 人称の中で完結していることから、聞き手に対して丁寧な言葉遣いとして使用していると考えられる。

次の例 18 は、補語が話し手の下女の場合に使用されている。

(例 18) 早／＼止さっしゃいと申て異見いたしましたが、それをも知り／＼、りんの馬鹿めが、幾布にいたした事やら、木綿の長ゆもじを、ちゃんとしめましたはな。(中流女性▲六十ぢかきばあさま→中流女性●人からのよ

(14)

きかみさま)【〈対等〉】(▲⇒下女りん)【〈上→下〉】『風呂』三編 169]

例 18 は中流女性同士の会話である。話し手と聞き手は〈対等〉の関係で、互いの下女について悪口を言っている。その中で「異見いたしました」が用いられている。「～いたします」は、聞き手に対して丁寧な言葉遣いをする場合に、補語とは関係なく用いられたことがわかる。

② Ⅲ人称での使用

以下の例 19、例 20 は、Ⅲ人称での使用例である。例 19 は行為の主体が人物、例 20 は行為の主体が物事の例である。

(例 19) にくい奴でございます、堪忍しておやり、今に帰ったら大きな目に逢せて遣りませう、などと申すと、先のお子も納得いたします。イエサその内にもよく云告口をする子がありますヨ。(風呂の人→風呂の人)【〈対等〉】(風呂の人⇒告げ口に来た子)【〈対等〉】『風呂』二編 120]

(例 20) 時にお見かけ申して、是非々々御頼しゅうたいミ申さねば相なりません儀がが不斗出来しゅうたいいたしまして、それゆゑわざ／＼。(中流男性質兵衛→中流男性左次郎)【〈対等〉】『八』四編下巻 219]

例 19 は風呂の中で出会った女性同士の会話である。行為の主体は告げ口に来た子どもであり、話し手にとって、特に敬意を表すべき対象ではない。例 20 は中流男性同士の会話である。行為の主体は「頼まなければならない儀」であり、話し手にとって、特に敬意を表すべき対象ではない。

「～いたします」は、〈対等〉の関係以上で、Ⅰ人称とⅢ人称(人物・事物)で使用される。どちらも、聞き手に対して丁寧な物言いをするために用いいたと考えられる。

(4-2) 「～いたす」

「～いたす」について見ていく。すべて文中で用いられ、謙讓語的な使用と丁寧語的な使用の両方が見られる。以下、敬語的人称にわけて用例を示す。

① Ⅰ人称での使用

Ⅰ人称での使用は、〈対等〉の関係以上で使用され、謙讓語的な使用と丁寧語的な使用が見られた。以下の例 21、例 22 はⅠ人称での使用例(文中)である。

(例 21) まことにあなたのお心の中を。推量いたせばいたすほど。わたくしの胸もほりさくやう。なる程おほうさんのある事を。おかくしなすつたは深ひお心。(乳母→中流女性小三)【〈下→上〉】(乳母⇒小三)【〈下→上〉】[『仮名(後編)』161]

(例 22) 彼只今の儀を見うけまして、なんぞ一句ありさうな物と存ましたから、種 / \ 勘弁いたして到頭高縄までで、やつと出来ました。(中流男性点兵衛→中流男性・俳句の師匠鬼角)【〈下→上〉】[『風呂』四編 245]

例 21 は乳母から女主人に対して、〈あなたのお心の中を推量する〉というところで用いられた例、例 22 は中流男性から俳諧の師匠に対して〈私は思うことを色々勘弁して〉というところで用いられた例である。したがって、例 21 は謙讓語の使用、例 22 は丁重語的な使用と考えられる。

②Ⅲ人称での使用

Ⅲ人称の使用例について見ていく。Ⅲ人称での使用は、人物や事物が主語になる例が見られ、いずれも丁重語として使用されていた。次の例 23 は中流男性与四郎から兄であり武士である与一に対しての発話で、行為の主体が話し手の舅の場合に「～いたす」が文中で用いられた例である。

(例 23) 段 / \ との御厚志お礼は詞に尽しがたし只今御意なされし茶入を受しは外舅欲右衛門先非を悔て娘を身請いたしかの茶人を持参として今日改めて自己へ嫁入さする。(中流男性与四郎→武士与一)【〈下→上〉】(与四郎⇒欲右衛門)【〈対等〉】[『恋』五編 230]

話し手にとって、行為の主体である欲右衛門は舅である。ただし、舅の欲右衛門についてよく言っている場面でもなく、舅を自分側の領域と考えた場合はⅠ人称になるため、丁重語として用いられていると考えられる。

以下の例 24、例 25 は行為の主体が事物の例である。例 24 の行為の主体は糠、例 25 の行為の主体は松花節である。

(例 24) 此まづ糠をおこぼしなすつた事は、これもおありがたいお米から分身いたしたものでござります。(中流男性お俳助→中流男性やみ吉)【〈対等〉】[『風呂』四編 275]

(例 25) 夫に此節松花節とか。申ものが流行^{いた}致す。さうでござりますが。〈下略〉。

(中流女性智清→中流男性惣次郎)【〈対等〉】[『紫』78]

例 24 は中流男性同士の会話で使用された例であり、補語は「お米から」と考えられる。話し手のお俳助は、丁寧過ぎる言葉遣いをする人物である。例 25 は中流女性から中流男性に対して、〈松花節というものが流行しているそうだ〉という内容で用いられている。どちらも、話し手や聞き手と補語の関係、話し手と行為の主体との関係等から、話し手は聞き手に対して丁寧な言葉遣いをするために「～いたす」を用いたと考えられる。

(5) 「～もうす」系

「～もうす」系は、「ます」の有無により使用分布が異なる表現形式である。

(5-1) 「～もうします」

「ます」を下接する「～もうします」は、I 人称での使用のみ見られた。次の例 26 のように、話し手と聞き手の関係が〈対等〉の関係以上で使用されている。なお、洒落本の例が 13 例中 8 例を占めており、話し手は他の人情本 5 例を含め、11 例が芸妓による使用であった。

(例 26) モシエ、お風でもめしてはお悪うございませから、直にお着物をめさせ申ませうネ。(中流女性嫁→中流女性姑)【〈下→上〉】(嫁⇒姑)【〈下→上〉】
[『風呂』二編 122]

例 26 は嫁から姑に対して用いられた例であり、〈下→上〉の関係である。補語は聞き手である。話し手は聞き手に対して、「めす」や「ございます」等を使用し、高く待遇していることから、「～もうします」も補語を高めるために使用していると考えられる。

(5-2) 「～もうす」

「ます」を下接しない「～もうす」は、I 人称と II 人称での使用が見られた。話し手と聞き手が〈下→上〉の関係から〈上→下〉の関係まで広く使用される。洒落本への偏りが見られず (53 例中 8 例)、芸妓の使用への偏りも比較的少ない (53 例中 25 例) 点が「～もうします」とは異なり、文末での使用も見られる点が、「～いたす」とは異なる。

① I 人称での使用

I 人称での使用は、補語との関係は〈対等〉の関係以上で用いられている。以下の例 27、例 28 は、話し手と聞き手の関係が〈対等〉の関係での使用例である。

(例 27) アノお乳母どん。わたしやア今おほうさんを。つれ申て恵迎院へ行ってあそばせ申すから。アノ齒入やが来たら。ながしの下駄の齒を入させて。おくんなさいよ。(下女→乳母)【〈対等〉】(下女⇒金坊)【〈下→上〉】[『仮名(後編)』127]

(例 28) いへもう余所のお子にけがでもさせ申してはすみませんから、負て帰るほうが能のさネ。(風呂の人→風呂の人)【〈対等〉】(風呂の人⇒よその子ども)【〈対等〉】[『風呂』二編 121]

例 27 の補語は、話し手と聞き手の両方にとっての主人の息子であることから、〈下→上〉の関係であると判断できる。例 28 の補語は、話し手と聞き手にとって、特に敬意を表わす必要のない人物である。例 27 は謙讓語的、例 28 は丁寧語的な使用と考えられる。

② II 人称での使用

II 人称での使用は、話し手と聞き手の関係が幅広く使用されている。以下の例 29、例 30、例 31 は II 人称での使用例である。

(例 29) それ見たがいゝ、畢竟泣せ申た。ヲ、ヲ、堪忍お仕、堪忍お仕。憎やつだネエ。(乳母→子守)【〈対等〉】(乳母⇒お嬢さん)【〈下→上〉】[『風呂』二編 139]

(例 30) ヲイお熊さん、此嬢をどふぞ奥へ連申てくんな。(中流男性梅次→中流女性お熊)【〈対等〉】(梅次⇒娘)【〈対等〉】[『告』四編 546]

(例 31) 似たにたとおっせへすが。誰に似申たのか。はなしてお聞せなんしな。(花魁まなづる→中流男性金五郎)【〈下→上〉】(まなづる⇒誰)【不明】[『仮名(前編)』274]

例 29 の補語は話し手と聞き手にとって高い敬意を表わすべき人物である。例 30 は、話し手が聞き手を同じ領域の人物と捉えて、補語に対して敬意を表わしていると考えられる例である。例 31 の補語は、話し手と聞き手にとって

【表5】近世後期江戸語における謙譲語形式の使用実態

表現形式	出現する位置による違い	行為の主体	話し手と聞き手の関係から		補語との関係から
			(下→上)	(対等)	
「お~もうしあげる」系	文中・文末	I人称	◎		謙譲語的使用 ●
		I人称	○	◎	●
		I人称	○	◎	●
		I人称	○	◎	●
「お~もうす」系	文中	II人称	○	◎ (中流女性が謙譲+尊敬の丁寧語的使用という特徴あり。他、謙譲語的な使用もあり)	●
		III人称 (人物)	◎		●
		I人称	△	○	●
		II人称	△	◎ (命令形のみ)	●
「~いたす」系	文中・文末	I人称	△	◎	●
		II人称	△	◎	●
		I人称	○	○	●
		III人称 (人物・事物)	◎	○	●
「~もうす」系	文中・文末	I人称	◎ (洒落本・芸妓の使用に偏りあり)	△ (洒落本・芸妓の使用に偏りあり)	●
		I人称	◎	○	●
		II人称	◎	○	●
		I人称	○	○	●
「~もうす」系	文中	I人称	◎		●
		II人称	◎		●
		I人称	○	○	●
		II人称	▽	△ (謙譲語的な使用)	●
「~もうす」系	文末	I人称	▽		●
		II人称	▽		●
		I人称	▽		●
		II人称	▽		●

※表中の記号は、各使用の用例数に対する使用率を出し、50%以上に◎、20%以上50%未満に○、10%以上20%未満に△、10%未満に▽を記した。

※「補語との関係から」の欄は、該当する使用が見られた場合に●を付した。

※特徴については、記号の隣りに記した。

※「一」は、下位分類なくとも共通の特徴であることを示している。

敬意を表わす必要のない人物である。

例 29、例 30 は話し手が補語に対して敬意を表そうとして用いていると考えられ、例 31 は、丁寧な言葉遣いとして用いていると考えられる。

5. まとめ

以上、謙讓語の表現形式を用いる際の行為の主体の敬語の人称、話し手と聞き手、補語との関係を観点に考察を行なった。まとめると、前ページの【表 5】のようになる。

5.1 各表現形式のまとめと関係

それぞれの形式についてとそれぞれの関係についてまとめる。まず、「お」を冠する形式から見ていく。【表 5】より、「お～もうしあげる」系、「お～いたす」系、「お～もうします」は、敬意を表わすべき対象に対して用いていることがわかる。補語と聞き手が一致する例が多かったが、主として謙讓語の使用がされていると考えられる。また、主として、〈対等〉の関係以上で、かつ、丁寧な言葉遣いの中で使用されていることもわかる。「ます」を伴わない「お～もうす」は、文中でⅠ人称で用いる場合は「お～もうします」と同様の使い方をするが、それ以外の場合に特徴が見られる。Ⅱ人称（文中）で使用する場合は、〈対等〉の関係の中流以上の女性が「謙讓語形式+尊敬語」という形を使用すること、Ⅱ人称（文末）で使用する場合は、命令形しか使用が見られないことが、他の謙讓語形式とは異なる。Ⅱ人称（文中）の中流女性の使用は、丁寧に言い過ぎたために使われた表現と考えられるため、丁重語的な使用とした。なお、「お～もうす」の使用範囲の広さは、「お～もうす」は当期に一般的な形式であったためであると考えられる。伊藤（2013）の述べるように接続する動詞に制限がなかったため、広い範囲で、丁重語に近い使用もされていたと考えることができる。その結果、高い敬意を表わす謙讓語形式が求められるようになったのではないかと考えられる²。

したがって、「お」を冠する形式は、主として、謙讓語的使用がされている。丁寧な言葉遣いの中で使用される「お～もうしあげる」系と「お～いたす」系、ぞんざいな言葉遣いの中でも使用される「お～もうす」系と捉えられる。「ます」下接なしの「お～もうす」は、Ⅱ人称の使用に特徴が見られ、丁重語的な使用

² ただし、小松（1967）が指摘するように、高い敬意を表すために「お～する」が使用されるようになったのではなく、「お～もうしあげる」や「お～いたす」が使用されるようになる。

と考えられるような例も見られる。

次に、「お」を冠さない形式について見ていく。「～いたす」系と「～もうす」系の共通点は、敬意を表わす必要のない補語に対して用いられる例が見られるため、謙讓語的な使用以外に丁重語的な使用もされていたと考えられる点である。両者の違いは、接続する動詞の違い(4.1)、「ます」下接の使用の違い、「ます」下接なしの使用の違いを指摘することができる。「ます」下接の使用の違いは、【表5】からわかるように、「～もうします」は洒落本への偏りと芸妓の使用の偏りが見られる点である。「～いたします」の方が、滑稽本や人情本における町人にとって、よく使用する表現だったと考えることができる。「ます」下接なしの使用の違いは、「～もうす」には文末での使用が見られたという点である。謙讓語的な使用も丁重語的な使用も見られるが、「～いたす」は文中でのみ使用されていることから、「～もうす」の方が、様々な場面、人間関係で使用されていたと推測することができる。

5.2 歴史的変遷における位置づけ

「2.1 謙讓語形式の変遷」で挙げたように、謙讓語形式は、「お～もうす」「～もうす」から、「～もうす」が消え、「お～いたす」、「お～する」が次々と成立していくという変化を辿る(小松(1967))。本稿が対象とした時期は、「お～もうす」と「～もうす」が大綱であった時期、「お～いたす」が成立していく時期に相当する。そのため、用例数という観点では、小松氏の述べる通りの結果となっている。変化の兆しという点で細かく見ると、以下の4点を指摘することができる。

- ①「ます」下接の「～もうします」が先に消えていく兆しが見られる
- ②中流女性が丁寧な言い方をしようとして「お～もうす+尊敬語」という形を使用している
- ③「お～もうす」「～もうす」のみ、文末で「ます」なしの形が使用されている
- ④Ⅱ人称での使用(②とも関連)が見られる

謙讓語形式が使用される場合、現代語では行為の主体がⅠ人称であるのが普通であり、Ⅲ人称で使用される場合もある。そして、Ⅱ人称の場合は使用されにくいと考えられる。しかし、近世後期江戸語では誤用とは考えにくい程度の用例数が見られた。聞き手側の領域や話し手側の領域のとらえ方や範囲の違いを検討する必要があるが、一般的に使用され多用される形式にのみ使用が認められる点は特徴といえるだろう。

①は、「ます」を下接して丁寧な言葉遣い、あるいは、聞き手に対して敬意を表そうとする場合に、「～もうします」では不十分であるという認識がなされ始めているのではないかと考えることができる。②は、多用されるに従い、聞き手に丁寧に言うという認識だけで使用できるようになったために見られた形なのではないかと考えられる。③は、「お～もうしあげる」系や「お～いたす」系とは異なり、幅広い人間関係で気軽に使用することができる形式になっていたことがわかる。

山田(2022a)で「まいる」の文末における使用(「ます」下接なし)と「お～だ」形式との関わりについて指摘した。これは、当期における丁寧語の体系の未発達という側面と、女性の使用の特徴という側面の両方から捉えることができる現象であった。今回の謙譲語形式では、Ⅱ人称の使用に特徴が見られたものの、女性の使用の特徴とまでは言い切れなかった。しかし、古くから使用され、当期に一般的に使用される表現(「まいる」や「お～もうす」「～もうす」)は、「ます」下接なしで文末で使用できるという共通点があることを指摘できるだろう。したがって、「お～もうす」「～もうす」から「お～いたす」へという流れの中で、「お～もうす」や「～もうす」に起こっていた変化を示すことができたのではないかと思われる。

6. 今後の課題

本稿では、近世後期江戸語における謙譲語形式の使用実態について明らかにした。今回の調査で明らかになった各形式の使用の特徴が、現代語にどう受け継がれていくのか、明治期東京語における使用についての考察を含め、さらに考察を進める必要がある。今後の課題としたい。

○参考文献

- 磯部佳宏(2010)「『謙譲語Ⅰ』と『謙譲語Ⅱ(丁重語)』」『山口国文』33
 伊藤博美(2013)「『お／ご～申す』と『お／ご～する』－働きかけの在り方とその消長－」『近代語研究』17
 菊地康人(1994)『敬語』角川書店
 小松寿雄(1967)「『お……する』の成立」『国語と国文学』44-4
 小松寿雄(1968)「『お……する』『お……いたす』『お……申しあげる』の用法」『近代語研究』2
 小松寿雄(1971)「近代語Ⅱ」『講座国語史 5 敬語史』大修館
 坂本恵(1984)「現代丁重語の性質－「致す」を中心に－」『国語学 研究と資料』7

- 辻村敏樹 (1968) 『敬語の史的 연구』 東京堂出版
辻村敏樹 (1992) 『敬語論考』 明治書院
永田高志 (2001) 『第三者待遇表現史の研究』 和泉書院
山田里奈 (2022a) 「近世後期江戸語における丁寧な言葉遣い—〈行く・来る〉を例にして—」『近代語研究』 23
山田里奈 (2022b) 「近世後期江戸語から明治期東京語における「動詞連用形+ます」の使用」『実践国文学』 102
湯沢幸吉郎 (1954、1957) 『江戸言葉の研究』 明治書院

○調査対象資料一覧 ※下線を付した形で本文の用例には記す。

『遊子方言』 田舎老人多田翁 (1770) (『新編日本古典文学全集』)、『甲駅新話』 大田南畝 (1775) (『新編日本古典文学全集』)、『古契三娼』 山東京伝 (1787) (『新編日本古典文学全集』)、『傾城買四十八手』 山東京伝 (1790) (『新編日本古典文学全集』)、『傾城買二筋道』 梅暮里谷峨 (1798) (『新編日本古典文学全集』)、『繁千話』 山東京伝 (1798) (『新編日本古典文学全集』)、『譚話浮世風呂』 式亭三馬 (1809) (『新日本古典文学大系』)、『柳髮新話浮世床』 式亭三馬 (1812) (『新編日本古典文学全集』)、『四十八癡』 式亭三馬 (1812) (『新潮日本古典集成』)、『花暦八笑人』 瀧亭鯉丈 (1820) (岩波文庫)、『妙竹林話七偏人』 梅亭金鷲 (1857) (講談社文庫)、『仮名文章娘節用』 曲山人 (1831) ((前編) 鶴見人情本読書会 (1998) 『鶴見日本文学』 2、(後編) 鶴見人情本読書会 (1999) 『鶴見日本文学』 3、(第三編) 鶴見人情本読書会 (2000) 『鶴見日本文学』 4)、『春色梅児誉美』 為永春水 (1832) (『日本古典文学大系』)、『春告鳥』 (1836) 為永春水 (『新編日本古典文学全集』)、『困情末摘花』 松亭金水 (1839) (浅川哲也 (2015) 『新國學復刊』 7 (初編~三編)、浅川哲也 (2016) 『人文学報』 512-7、首都大学東京都市教養学部人文・社会系 首都大学東京人文科学研究科) (四・五編)、『春色恋廻染分解』 山々亭有人 (1860) (浅川哲也 (2012) 『春色恋廻染分解 翻刻と総索引』 (おうふう))、『毬唄三人娘』 (初編~三編) 松亭金水 (1862) (浅川哲也 (2011) 『人文学報』 443 (首都大学東京) (初編~三編) 山々亭有人 (1862)、浅川哲也 (2012) 『人文学報』 458 (首都大学東京) (四編・五編))、『春色江戸紫』 (初編~三編) 山々亭有人 (1864) (浅川哲也 (2013) 『人文学報』 473)

本稿は JSPS 科研費による若手研究「近世後期江戸語から明治期東京語における丁寧語の体系変化に関する研究」(課題番号: 22K13130) の成果の一部です。

(やまだ りな・実践女子大学専任講師)